

## 〈雨新者〉を探し求める人

石村柳三詩論集『雨新者の詩想』に寄せて

石村柳三さんの詩論集『雨新者の詩想』の一〇二編の膨大な原稿を何度か読みかえしている時に、私は三つのことが想起させられた。一つは早春に咲きはじめる紫色のホトケノザという野草の名前だ。冬枯れの野から命が甦ってくる花をホトケノザと名づけたのは、仏教を信仰し始めた古代の民衆の豊かな感受性だったろう。早春の野原に春の陽射しが降り注いでくる。その日溜まりの場所を仏（ブツダ）が座る場所だと例えた私たちの先祖である古代人たちがいたのだ。ブツダは菩提樹のもとで悟りをひらいたという。法華経によるとそのブツダを讃えるように、香しい風がしばんだ花を吹き飛ばし、新しき花々が次々に降り注いでいたという。次は二〇〇四年に石村さんが上梓した評伝『石橋湛山——信念を背負った言説』で紹介していた湛山が大事にしていた法華経の「雨新者の精神」という言葉だ。そして最後には法華経の精神を伝えようとしていた宮沢賢治の最後の言葉想起させられた。賢治は三八歳で亡くなる臨終の際に、言い残すことはないかと父に尋ねられ、次のような意味の遺言を方言で語ったと言われている。

石村さんの詩論の核である〈仏意〉が詩的精神とどこで重なってくるかをこの小論で考えてみたいと思っている。

石村さんは鳴海英吉さんが親しくしていた詩人であり、詩論家であり、石橋湛山の研究者だった。二〇〇〇年八月三十一日に鳴海英吉さんが亡くなり、その年の十二月に刊行した「COALSACK」三八号は鳴海英吉追悼号だった。鳴海さんの代表作二十六篇、追悼詩六篇、追悼文十篇に加えて私がまとめた年譜と鳴海英吉論「反復の職人」が掲載された。その号が出た直後にそれまで交流がなかった石村柳三さんから電話があった。私の「反復の職人」を読み共感したといい、石村さん自身も鳴海英吉論を書きたいとの申し出だった。話していると石村さんは鳴海さんの詩人としての価値だけでなく、日蓮宗不受不施派についての鳴海英吉の研究のことも詳しいことが分かって驚かされた。石村さんは立正大学で宗教史を学び、日蓮宗新聞社の記者をしていた経歴の持ち主だった。鳴海さんの不受不施派研究者の活動について、私以外の詩人たちはほとんど知らないと思っていたが、石村さんがそのよき理解者であったとことを知り心強いと思った。二〇〇二年の三回忌の八月三十一日「鳴海英吉全詩集」が刊行された。同年の十二月に刊行された「COALSACK」四四号では『鳴海英吉全詩集』書評特集をしたが、その時に書評を九名の詩人が寄せてくれたが、その一人が石村さんだった。同号に〈鳴海英吉全詩集〉を繙いて―特に鳴海英吉の筆

「国訳妙法蓮華経を一千部おつくり下さい。表紙は朱色、校正は北向氏、お経のうしろには『私の生涯の仕事はこの経をあなたのお手もとに届け、そして其中にある仏意に触れて、あなたが無上道に入られますことを。』ということを書いて知己の方々にあげて下さい。」

賢治が法華経の精神から促されて、その人生に決定的な影響を与えられたように石村さんも法華経の精神に深く影響を与えられている。冒頭の評論「雨新者」は法華経化城喻品の中の言葉を論じたものである。石村さんの詩論は、詩人達の無意識に密かに流れている〈仏意〉を汲み上げ、それを浮き彫りにさせていく知恵を開示させてくれる。そんな〈仏意〉から詩論・評論・エッセイを書いている詩人では、昨年亡くなった秋田の田口昭典さんがいる。田口さんは『宮沢賢治と法華経について』という三冊目の賢治論を書き上げた後に急死してしまっただが、娘婿で同じ賢治研究者である岩手の牧野立雄さんがその遺志を継いで出版された。また秋田の僧侶である亀谷健樹さんも〈仏意〉を詩作、詩論に息づかせて詩誌「密造者」を継続している。そのように東北の地で賢治は自らの生き方に影響を与え続けるものとして在り続けている。石村さんも青森の出で、その東北の仏教的な土壌が石村さんをして「雨新者」を根幹に据えた詩論を考察させてきたと言える。

名について〉を書き、四五号には、「鳴海英吉と不受不施派の研究」などの力作を書き上げてくれた。この二篇は今回の詩論集にも掲載されている。四四号では私が鳴海英吉というペンネームの由来への疑問点を課題として残していたことを徹底して調べてくれた。鳴海さんが私に語った「東北のプロレタリア詩人から借りた」ということから青森の歌人の「鳴海要吉」にまで辿り着いた探求心は、自分の出会った詩人と真に出逢うという意味の「相逢する」ということを実践しているのだと教えられた。四五号では石村さんは立正大学の日蓮教学研究所に向き取材をし資料を集め、鳴海さんの不受不施派の研究者の側面を浮き彫りにして論じてくれたのだった。その意味で鳴海英吉研究の最も中心的なメンバーの一人として私は石村柳三さんに敬意を抱いたのだった。

石村さんは青森県出身だが、いまも話す言葉に津軽方言のニュアンスを残している。石村さんの存在が北国の大地・山河と繋がっているように感じられてくる。その率直な語り口には何ら銜いのない、大地から沸き上がってきた恵みを分け合う喜びを語り、そこで生きる人間たちの苦悩を直視し、その真実を正面から受け止め続けたのだ。鳴海英吉と石村柳三は気取らない率直さにおいて共有するところがあると直感していた。それは法華経の中の「不軽菩薩品」にあるどんな人でも軽んじたり侮ったりすることなく、仏性をもった存在として合掌礼拝する平等精神が肉化されていると感じられるか

らである。鳴海さんと同様に仏教に関して深い見識があるだけでなく、《仏意》を生きて、それを伝えようとする秘められた情熱を私は感じたのだ。二人とも仏が内部から湧出してくる瞬間まで、自他の人間の苦悩を掘り下げていこうとする。後で引用する評論「雨新者」の中の言葉で石村さんは「人間存在の苦悶」を人間に課せられた根源的な条件であるという。鳴海英吉はシベリヤ抑留体験から民衆の不屈の精神を考えていった。そして中世の一遍上人の「捨離」という考え方を高く評価し、既成の考え方感じ方を捨てて再構築しようと考えた。さらに日蓮宗不受不施派に対する江戸幕府の大弾圧の歴史を後世に残そうと実証研究を続けた。石村さんは鳴海さんのよき理解者であり、飢饉に苦しんだ故郷の民衆の魂に立脚し、死の中に生を、生の中に死を見詰めながら詩的精神に仏教的な精神を透視しようとしてきた。「雨新者」の最後は次のように締め括られている。

仏教すなわち仏の教えは、そもそもわれわれ人間の生や死の存在を含んだ、《縁起（原因と結果Ⅱ因果の法則）》を説いたもので、決して陰気くさいものではないのだ。人間存在の苦悶を説く哲学を、深遠に血脈しているものもあるのだ。そういう人間生存の「生死海」を仏説し、言説している『仏典』を、ときにはひもといて味わってみるのも感性を高め、広め、深める血となり肉となりうるであ

のだろう。無明（無知）なる人間だからこそ人間は自己の内面を凝視して、本来的なものを甦らせようとする。そんな強いモチベーションをこの詩論に私は感ずる。本来的なものとは「新鮮な雨のもつ、その音のリズムに自らを内在し、背負う自然の意思」であるという。この精神的な在り方は、現象学的な還元方法と似ていると私は感ずる。おのれが徹底的に無知であると認識することからすべては始まると語っているのだ。そしていつのまにか育った環境や社会的な地位で身に付いてしまった教条主義を取り払い、新しきものとして甦っていくことが詩や文学を生み出す詩的精神の根源的な課題であることを繰り返し語っているのだと思われる。

『雨新者の詩想』は四章から構成されている。上下二段組で四六四頁もの大冊だ。この三十年間に書かれた石橋湛山以外の評論・詩論・書評の大半が収録されている。一章は代表的な詩論で「雨新者」後には、自らの病気の体験談を交えて山頭火と高見順を論じた「生死海の風光」から始まる。次には宮沢賢治について二編の評論、「宮沢賢治の詩精神」と「デクノボー精神」のエネルギーと宮沢賢治」が続いている。

なかんずくりフレイインされているへおれはひとりりの修羅なのだの詩言には、賢治はひとりりの人間としての自己を《修羅》と規定し、悩み、悲しみ、苦しみ、そしてさらには自己を否定するような問いを発している凝縮された流露の心

ろつと語っておきたい。無明の中にある、自己存在を凝視する眼を認識するためにも。

《雨新者の精神》にはそういう詩的感性を呼応し流脈するところがある。それはむろんいうまでもなく、求心し、自問する文学的精神に宿っているものでもあろう。新鮮な雨のもつ、その音のリズムに自らを内在し、背負う自然の意思にである。『仏典』は、人間生存の思惟と感性をコイルする《雨新者》に、普遍的な声をふらしている心情をつつんでいる。（『雨新者』より）

石村さんは、仏教とは「人間存在の苦悶を説く哲学を、深遠に血脈しているもの」であるという。石村さんは五十歳代で癌にかかり、また透析も開始した。その不治の病を抱えながらも、一切そんな素振りを見せずに、多くの詩人たちの詩作を深く読み、論じ続けている。石村さんの特異な肉化されたような述語は、一読して分かりづらい。しかし例えば「血脈する」、「流脈する」、「コイルする」などという動詞などは、それしか例えようのない石村さんの存在の在り方から発せられた述語なのだ。「無明の中にある、自己存在を凝視する眼を認識する」などという石村さんの言説は、仏教的人生観を端的に語っている。「人間の苦悶を知っているからこそ『雨新者』に成り得る可能性のある人間存在の底知れぬ能力を目撃する

理があり、そこに賢治が先に語った《不軽菩薩の精神》に交感し近づいて行つたというのも、デクノボーの詩人としては当然であり自然であつたとも言える。

言い換えれば賢治が「農民芸術概論要綱」の中で「なべての悩みをたきぎと燃やし、なべての心を心とせよ」、さらには「われらに要るものは銀河を包む透明な意志 巨きな力と熱である」のごとき感情を吐いたのも、そこから、否そこに「銀河を包む透明な意志」すなわち「宇宙の意志」につつまれるようにして、自己を見つめ、捉え、修羅のなみだを流しながら実践し、巨きなへまことの祈りの文学を生もうとしたからであらう。

『デクノボー精神』のエネルギーと宮沢賢治」より」

この引用でも分かれるとおり石村さんは的確に賢治の本質を言い当てている。賢治の《修羅》が「なべての悩み」であり、人間存在の無明（無知）に起因しており、だからこそ《不軽菩薩の精神》に近づいていきたいという賢治の祈りを辿っている。さらに賢治のその「デクノボー精神」が「宇宙の意志」へ繋がっていることも透視している。

石村さんの詩論の興味深いところは、さらにその「宇宙の意志」を抱えた例として『リグ・ヴェーダ讃歌』に見る詩想と詩人像」という古代インド文明の詩想を紹介し、現代の詩人たちに賢治と共通する志の高さを開示させてくれている

る。岩波文庫『リグ・ヴェーダ讃歌』（辻直四郎訳）は紀元前一二〇〇年頃を中心に編纂されたインドで最も古い讃歌集である。辻直四郎の前書きによるとサンスクリット語（梵語）の最古層であるヴェーダ語で書かれているという。十巻の讃歌と補遺歌から成り、一〇二八讃歌を含んでいる。石村さんは『リグ・ヴェーダ讃歌』について次のような評価を書き記している。

「いみじく讃美せられてこのインドラは、真正なる賭物を施す。この寛裕なる「神」が、「その」進行に際し、よく祈り、よく「神酒を」搾る人間に、「活動の」自由を授けん」

人間に授けられた、自由な活動の行為こそ、ヴェーダ詩人の矜持しなければならぬプライドであり、自由表現のさげびであり、自由空間への語りであつたと思う。

そして、そうであればこそヴェーダ詩人は、自らを自由空間へ告げるのだ。天則の泉を涸らさないためにも。

「思想を織るわが糸の断たるることなかれ。」

ここで捉える思想とは、詩作のことを意味している。今日の詩人にも通ずる名言であるといつていい。このヴェーダのことばは、私の心を強く打つ。

的精神〕となって甦り、到来することを物語っているのではないか。石村さんはそんな精神を抱えて実践している（雨新者）たちを探し求める人であり、自らもその一人なのだ。

石村さんは二〇〇六年十一月に開かれた「第三回鳴海英吉研究会」で三十分ほど「鳴海英吉と石橋湛山」という演題で講演をする予定になっていたが、前日の透析の影響からか足の具合が悪くなり歩けないので、行けそうにないとの連絡があった。しかしとても残念そうだった。私は思いきって奥様と一緒にタクシーで来られませんかとお願ひした。私は石村さんがこの講演をするために準備をされていて、鳴海さんを愛する人たちの前で話すのを誰よりも楽しみにしていたのを知っていたからだ。石村さんと奥様は私の申し出を聞いてくれて講演前に駆けつけてくれた。同行され心配そうだが石村さんの評論・詩的活動を支え信じているひかえめな姿の奥様と、何もなかったように講演をする石村さんの二人を見て私は感動した。また病をおしてまで石村さんが語ろうとした鳴海英吉・石橋湛山と石村さんの関係の深い絆こそ相逢の関係だと認識させられた。私は石村さんから詩人が出会うべき根本的な姿勢を教えられた気がした。この詩論集に収められた一〇二編の詩論・エッセイ・書評を多くの詩人たちに読んで欲しいと願っている。石村さんは詩人の言葉を、春の野に降り注ぐ新しい光のように、新しい花びらのように、仏の命を孕むものとして受け止めて詩論を書き続けていくのだら

またつぎのような、讃歌も忘れてはならない。その詩節の言葉を再び引用しておこう。

「汝は「みずから」詩人として詩人「讃歌者」に達せんとす」

「詩人よ、その言葉を忘るるなかれ、後代の人々が語り伝えべき汝の「その言葉」を。」

以上のような神々への天的言語の中に、靈感者たるヴェーダ詩人の誇りが秘められていたのだった。詩を愛する現代の詩人にも聞かせたい詩的言語だ。

（『リグ・ヴェーダ讃歌』に見る詩想と詩人像」より）

石村さんは賢治の「宇宙の意志」と世界最古の詩想である「リグ・ヴェーダ」の「神々への天的言語」が実は繋がっているであり、いまでも根源的に詩作しようとする者たちの無意識へ静かに語りかけているのだと告げている。石村さんは詩人の詩語は、詩人の死後に後世の人々によって語られることを想像しながら記すべきだ、というリグヴェーダに記された古代の詩人の言葉を提示する。そして現代の詩人たちに数千年前の詩人の志の高さや詩人の誇りを投げ掛けて、自らもその問いを真剣に生きようと考えるのだ。その問いの果てに、香しい風という（仏教精神）が時代を超えて新しきものという（詩

う。